LABOTTO Life Community Press
自然と暮らす。　自然に暮らす。
企画・発行／八光建設株式会社 〒963-8026 福島県郡山市並木１丁目１番地の11
TEL.024-922-8553 FAX.024-939-1052　　http:www.labotto.com

自然生活
Shizen Seikatsu

Vol.3
February 2005

不自由さをとことん楽しむ。

ひめさゆりの里として知られる熱塩加納村の奥深い山里に、自分たちが求める理想の制作工房を開いた青砥昭修さん（日本画）・小野博子さん（染織・裂織）・佐々木あすかさん（日本画）の三人の芸術家を訪ねた。日々の生活にも不自由するのではと思われる山里に、11年もの間自給自足に近い生活を続けながら創作活動を続ける三人の暮らしに触れてみた。

特集　工房「椹」――ひめゆりの里に三人の芸術家を訪ねて

都会から山深い田舎の里へ

我々が訪れた工房「椹（ゆづりは）」は、会津北部を流れる濁川を上流域まで遡った熱塩加納村黒岩地区にある。北東西の三方を１０００メートル級の山で囲まれ、ここから北に５キロ程行けば、そこはもう山形との県境となる。現在はわずか６世帯11人が暮らすだけであり、冬になれば積雪は平均で約２メートル、最大で４メートル近くにも達する、厳寒期にはまさしく陸の孤島となる福島県内でも屈指の豪雪地帯である。ところが、今年はどうも様子がおかしい。例年であれば、我々がここを訪れた12月初旬には多少なりとも積雪があっておかしくないのだが、今年は降雪の跡すら見ることができないのだ。異常気象はこの山深き里にまで間違いなく押し寄せている。

工房「椹（ゆづりは）」は廃校となった小学校をそのまま利用している。だから、体育館もあれば給食室もある。それが何かと使い勝手がいい。体育館では毎年５月の連休中に「椹（ゆづりは）展」を開催、遠方からもたくさんの来場者がつめかけ、好評を博している。ここで創作活動を続けている青砥昭修さん・小野博子さん・佐々木あすかさんの３人は、ともにプロの作家であり、出身も育ちも福島県とは何の縁もゆかりもない。そんな３人がなぜ工房としてこの山深い黒岩の地を選んだのだろうか、この工房の主宰者でもある青砥昭修さんに単刀直入に訊いてみることにした。

「都会の喧噪から離れて、環境のいいところで創作活動を続けたいと思うようになりました。それならいっそのこと、文明の利器に冒されていない田舎に引っ越そうかと。そこで、どこにしようかと考えていたとき、自分の小学校時代を思い出したんです。

青砥さん撮影による黒岩集落の雪景色。工房近くに古民家を借りて３人は暮らしている。今年の冬は雪になるのが遅く、取材当日は雨。その夜から雪になるとの予報があった。

都会にはない人と人との素朴な関わりの中で生きていたい。

私は一時期、青森に住んでいたことがあって、冬というとどうしてもそこでの雪景色がイメージ付いてしまった。だから、雪が降らない冬はどうしても冬と感じられなくなってしまったのですね。それで豪雪地帯を選びました」

では、なぜ熱塩加納村だったのだろう？

「信州も候補にあがっていたのですが、そこにある山は軒並み急勾配で山裾が狭いため、東北に比べて山あいの文化があまりありません。東北の方が奥まで人が住める場所があって、自然の中に融合して暮らす雰囲気があるんです。そういう理由で、東北を選びました。この村を初めて訪れたのは、今から13年前です。人からの紹介の紹介で、それまでこの村のことは全く知りませんでした。来てみると、ここには私が考えていた理想的な環境が多分に残っていた。文明の利器に冒されていないし、余計な雑音もないのがよかった」

なるほど、青砥さんの考えは分かった。しかし、その考えに（いい意味で）付き合わされることになる小野さんと佐々木さんは反対しなかったのだろうか？

「（青砥さんに）騙されて連れてこられたんですよ」と小野さんはちょっと戯けた後、こう続けた。「よく仲間うちで旅行に行っていたんですね。3回に2回は東北でした。で、旅行をしている間に、いつかはこんな環境のいいところで暮らしながら創作活動を続けていきたいと思うようになったんですね。あと、都会が苦手だったし。それで青砥さんから話があったとき、ちょうどいい機会だと思って参加しました」

「東京生まれの私にとって、雪国の恐さや自給自足の大変さをまったく知りませんでした。だからこそ、ここに来ることができたのかもしれません」3人の中で一番若い佐々木さんは、ここへの移住に反対だったご両親を説得するために、引っ越す前にお母様を連れてここの環境をすべて見せたという。画家として生活できるようになって、やっとご両親も安心してくれたそうだ。

廃校となった小学校を利用した工房「椹」の春。5月の連休には毎年「椹」展を開催。
作品展のほか、一流の音楽家たちを招いた本格的なコンサートも開かれ、たくさんの人でにぎわう。

ところで、3人は純粋に創作活動をするためだけに、この地を選んだわけではないという。

「仕事を最優先で考えたことはありません。作家であるかないかということは二番目であって、都会の人工的なもの・誰もが同じものを持っている社会に囲まれて暮らすのがいやだったというのが一番です。環境がいいからここを選んだ。だから、ここまでやってこられたと思います」

実は3人がここに移住するにあたって、あらかじめ決めたことが2つあった。「どんな都合があっても、食事だけは必ず3人一緒でとる」ことと、「作れるものは自分たちで作る」ことの2つである。「食事の際は、一日のどんな些細なことでもいいから話をしながら食事をしようと。そうしないと各自が勝手気ままになってしまって、共同生活をしている意味がなありませんから。それに、私たちは3人とも物作りを仕事にしている人間ですから、作れるものは物から食料まで可能な限り自分たちで作ろうということにしました。農業は地元の方に一から教えていただき、今では、お米は100％自給自足、野菜も化学肥料を一切使わない安全で美味しいものができるまでになりました」

3人はかつての小学校の教室をそれぞれアトリエとして利用している。冬は雪にすっぽりと埋もれるが、そのためにかえって暖かさが増すという。

環境が変われば素材も変わるし、作品も変わる

「この場所で1人や2人でゼロから何かを始めるのはさすがに困難でも、3人いればある程度力を合わせてやっていけます。生活していけるわけです。また、3人の組み合わせは男だけでも駄目、女だけでも駄目。両者が日々のいろいろな仕事を分けあい協力しあって、はじめて暮らしが成り立ちました」と青砥さんたちは言う。

また、ここでの生活によって、3人が3人とも作風に何らかの変化があったという。

「いままでモチーフとしなかったものを、モチーフにしてみようと思うようになりました。今、私が手がけている作風は、都心にいるときは『古臭い』と絶対にやろうとは思わなかった（笑）。ただ、落ち着いてこういう環境の中で暮らしてみると、昔の人たちの作品をあらためていいな、と思えるようになっていました」と青砥さんは言う。

小野さんの草木染めの材料は、ほとんどがこの地区の山に生えている雑草や木肌である。小野さんはここに引っ越してくるにあたって、部落の人にはあらかじめ山に入り草木を採る許しを得たという。

「でも、それが大事なことだと思います。都会の人は山にあるものは何でも採っていいと思っていますが、駄目なんですね。山も個人や共有の財産なんです。それを知らないで勝手に採るから、地元の人から言わせると『乱獲』ということになる。たかだか草一本・木一本でも大事なことなんです」

同様に、生活水準を落とすことなく自然環境だけを求める今風の「田舎暮らし」の考え方は、地元の人と軋轢を生む身勝手な考え方だと青砥さんは苦言を呈する。本当に「田舎暮らし」を求めるなら、それなりの覚悟が必要なのだ。

「春のいざない」 青砥 昭修

個展「帯」より 小野 博子

「秋」 佐々木 あすか

「ゆづりは」の言葉に託す生きることへの思い

青砥さんはここでの生活を通して、人間が生きていくために必要なのは「知識」ではなく「知恵」だということに気付かされたという。不便な環境で暮らす程「知識」は何も意味をなさず、「知恵」が必要になってくる。「知恵」は不便さの中から学ぶものである。しかし、都心では「知識」があれば生きていける。「知恵」は必要ない。「知識」はお金を払えば誰もが持つことができるようになった。現在の教育問題にもつながる話である。

取材を終えて外に出たとき、雪ではなく、なんと雨が降っていた。いずれ雪に変わるだろうが、この時期に雨が降るとはこれまでにはなかったことだ。青砥さんが望む冬らしい冬は、今年はどこへ行ってしまったのだろうか。

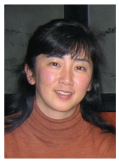
最後に、工房の名前の由来について触れておきたい。「ゆづりは（ゆずりは）」とは、春の新緑を見届けてから古い葉が散るので通常「譲葉」と明記される常緑樹である。この工房もいずれ若い世代へと受け継いでいってもらいたい。上の世代から下の世代へ工房を、そして日本美術を託す思い。3人の思いが伝わってくるいい名前ではないか。

建物の中はいたるところにかつて小学校であった名残りが見受けられる。

プロフィール Profile

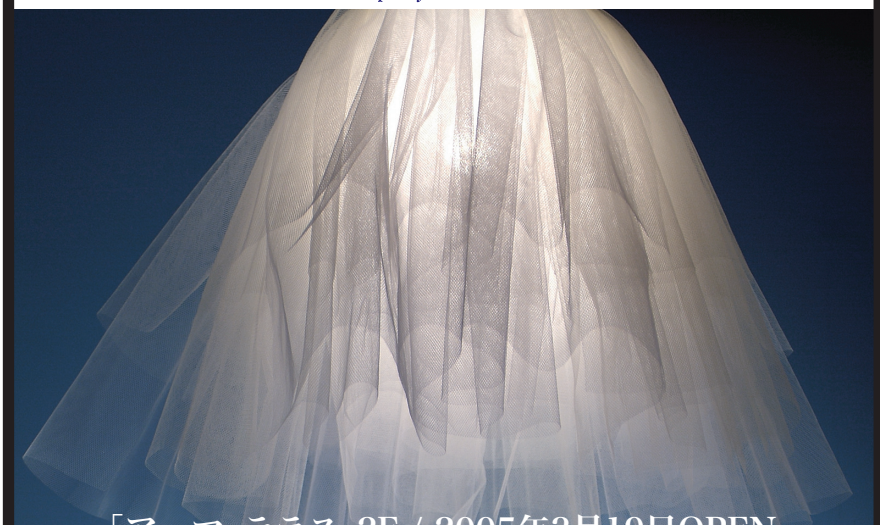
青砥 昭修さん（Akinobu Aoto）
日本画家。1956年千葉県生まれ。東京芸大大学院終了後、渡米。91年オーストラリア先住民アボリジニー芸術研究のため渡豪。93年熱塩加納村に移住、工房「椢」を開く。同工房主催。創画展、美術大学卒業生選抜展、福島県展（福島県美術賞）、臥龍桜日本画大賞展、An Exchange of Ideas（イギリス王立美術学校付属ギャラリー）他、個展・グループ展多数。現在無所属、個展を中心に活動。

小野 博子さん（Hiroko Ono）
染織・裂織作家。1960年福岡県生まれ。88年東京芸大大学院形成デザイン専攻終了。93年、京都川島テキスタイルスクール終了。同年、熱塩加納村に移住し、工房「椢」を開く。「日本クラフト展」入選（98）、「全国裂織公募展」入選（02）他、個展を中心に活動。



佐々木 あすかさん（Asuka Sasaki）
日本画家。1964年東京生まれ。88年女子美術大学卒業。93年熱塩加納村に移住、工房「椢」を開く。個展・グループ展など多数。

have a nice party-time at ama-terrasse



「アーマ・テラス」2F / 2005年3月19日OPEN

パブリックスペース *ama festa*（仮称）

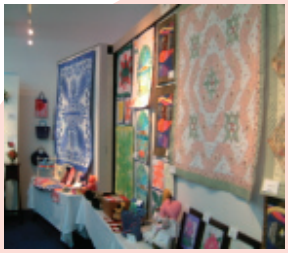
アーマ・テラス 2F にパブリックスペースが誕生いたします。
スェーデンの王宮の家具のデザインを手掛けた
オーケ・アクセルソン氏がこのデザインを担当。
最大約 100 席のフリースペースで、ウェディングの他にも
会合、コンサート、アートギャラリーなどにご利用いただけます。
チョンシェフがつくる ama-terrasse のロイヤル・チャイナを
みなさまの素敵なパーティーシーンでぜひお楽しみください。

ama terrasse

アーマ・テラス
福島県郡山市並木 2-1-3　〒963-8026
Hours/11:30am ～ 10:00pm

◎お電話でのお問合わせは　tel. 024-991-0141

ama-terrasse に関する様々な情報を HP にて紹介しております。ぜひご覧ください。
http://www.amaterrasse.com



2005 楽しい手しごと作品展

「上巳―桃の節句を楽しむ会」の節句料理

Event イベントのご案内

LABOTTO イベントスケジュール 2月▶4月

2005 楽しい手しごと作品展

2/26（土）▶ 3/8（火）
日替わりの教室開催と、講師・一般作品展示。
手しごとの魅力を存分に楽しめる 10 日間。
企画：ラボットファブリクス

新シリーズ企画登場！
日本の歳時記をおいしく学ぼう。

第1回「上巳―桃の節句を楽しむ会」

3/3（木）12:00－14:00
参加料：￥2，000（食事代含む）
定　員：10 名様限定
場　所：肆木（しもく）の家
※開催日は変更になることもございます。ラボットイベントスケジュールにてご確認ください。

須永晃仁和尚をお迎えし、穀菜食による五節供（上巳・端午・七夕・重陽・人日）の料理を昼食に楽しみながら、日本古来から伝わる歳事のいわれ、しつらえなど季節感のあるお話をいただきます。忘れ去られてしまいそうな日本の心豊かな暮らしを取り戻してみませんか？

ama festa（仮称）オープン記念イベント

3/12（土）▶ 3/22（火）
場　所：アーマ・テラス 2F

渡辺扶起絵画展

3/31（木）▶ 4/7（木）

news release

オンリーワンの家づくり。
arc アーク
LABOTTO

室 内（2002 年 5 月）
特集「ハウスメーカーより工務店」の中で、ラボットの内装設計を担当してくださった建築家“ 青島裕之” 氏に八光建設を推薦していただきました。

室 内（2004 年 8 月）
「TRY! リフォーム」のコーナーで地方ゼネコンの挑戦 1 と題して資材倉庫がラボットのショールームへと生まれ変わるまでが掲載されています。ラボットが以前、資材倉庫だったことはご存じでしたか？

室 内（2004 年 9 月）
2004 年 8 月号に続く第 2 弾。築 20 年以上経った郡山市栄町のマンションがリフォームで生まれ変わる様子が掲載されています。リノベーション（再生）マンションの展示場として 2004 年 9 月に OPEN しました。実際にご覧いただけますので、お気軽にお申し付けください。

住宅建築（2002 年 7 月）
コンセプトハウスとしてラボット内に建築された「肆木の家 2」が掲載されました。釘や金物を一切使わない歴史工法で建築した住宅です。ぜひ一度実物をご覧ください。

福島民報（2004 年 1 月 18 日）
アーク・ラボットが提案する「住まいづくり」について掲載されています。

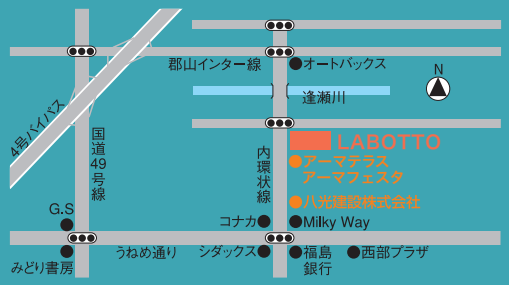
フジサンケイ ビジネスアイ（2004 年 6 月 22 日）
アーク・ラボットができるまでの経緯が取り上げられました。

福島建設工業新聞（2004 年 2 月 27 日）
住宅事業へ取り組むまでの経緯が掲載されています。

毎日新聞（2003 年 10 月 23 日）
新しい建築ショールーム「ラボット」の紹介が掲載されています。

国際グラフ（2004 年 7 月）
主に公共事業を請け負っていた八光建設（株）から、住まいの総合展示場「ラボット」とレストラン「アーマ・テラス」が誕生するまでの経緯や経営理念などが対談形式で掲載されています。

［建築設計資料］98 用途変更
～改修刷新・保存再生・コンバージョン～
用途変更を伴う中古建物の改修・刷新事例を紹介する書籍です。資材倉庫から、ショールームへと変身を成し遂げた「ラボット」がその一例として掲載されています。



LABOTTO ラボット
〒963-8026 福島県郡山市並木 2-1-1
TEL.024-995-5855
【営業時間】10:00～19:00 http://www.labotto.com
ラボットは「住まうコト・楽しむ」を提案しています。
新築・リフォームの設計・施工、インテリアやファブリック、ガレージにいたるまで、
快適な暮らしのアイテムをたくさんご用意いたしました。

◎お問い合わせ、お申込みはすべてラボットにて承ります。お電話またはカウンターでお申込みください。
なお、都合により日程の変更等ございますので、あらかじめご了承ください。

R100 本文は古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK